

OR を築いた人々(16)

森村英典先生の周りでは
なにか新しいことが始まる

森 雅夫

1962年、東京工業大学理学部に新設されたばかりの応用物理学科に1期生として所属した私は、数学、物理、化学を広く学ぶことに魅力を感じながらも、自分のコアを何にすべきかとまどっていた。3年次に、Fellerの本をベースにした応用確率論の講義を聴きそのおもしろさに引き込まれた。森村先生は助教授に新任されたばかりで元気はつらつ、説明はていねいでわかりやすく、そのリズムも心地よかった。翌年の卒業研究では、迷うことなく森村研を選んだ。卒研究生は5人、何もかも新しかった。研究室に入った初日に、我々の前に5冊の本が並べられた。私はその中で一番小さな本、Cox & SmithのQueueを選んだ。DantzigのLPを選んだ友人は重そうな本をいつも持ち歩いてきた。このゼミのおかげで、LP、DP、待ち行列、信頼性、経済性評価など、ORを広く学ぶことができた。山田堯君と一緒に大学院に進み、DoobのStochastic Processesを読まされ難渋した。わかっているのは先生ばかり。

同じころ、QR会[1]の流れをくむ先生方の、毎週土曜の夕方に開かれる研究会に参加することを許された。真壁肇(当時、横浜国大)、鈴木武次(当時、法政大)、藤沢武久(電通大)、牧野都治(当時、高崎経済大)、岸尚(防衛大)、藤井光昭(東工大)の各先生方をはじめ、電電公社通研から雁部頼一、藤木正也、中村義作、村尾洋、橋田温の各氏の他、いろいろな研究者が入れ替わりながら参加した。その運営は、河田ファミリーの研究会の運営を踏襲されたものであろう、「来るものは拒まず、去る者は追わず」で厳しいながらも自由な雰囲気で行われていた。この研究会は、待ち行列研究部会[2]へと発展する。

その年の夏休みにORの若手研究者の会SSORを高山でスタートさせることになったから、その勉強会に参加するよう話があった。東工大は慶應と組んで、マルコフやネットワークなどの勉強をした。慶應から

は、当時、博士や修士の学生であった、柳井浩、真鍋龍太郎、若山邦紘、福川忠昭などの皆さんが、毎週土曜の午後に東工大に来られて、本読みをしたものである。SSORは実に多くの若手の仲間をつくってくれた。

2年のときに、卒研究生として高橋幸雄、森清堯、吉沢康文(現・農工大)の諸

君が研究室に入ってきた。彼らが修士2年のとき森村先生は1年間North Carolina大学に文部省の在外研究で行かれた。森村先生の周りには、東工大のみならずいろいろな大学から、若手研究者が集まり、和気藹々と議論をし、ときには遊んだものである。そういう雰囲気作りがいつも自然に行われた気がする。それは、先生のおおらかな気性によるところが大きい。学生を縛らず自由にさせ、適切なヒントを与え、勉強をさせるのが上手かったように思う。

森村先生は1928年10月20日、東京の生まれ。お歳は違うが、皇后陛下と同じ誕生日である。府立一中のときに、今野浩氏(前々OR学会会長)の父君に数学を教わったそうである。1951年に東工大応用数学コースを卒業。河田龍夫先生の門下生であった。真壁肇先生は横浜高等工業の時代から続いている同期生である。卒業の前年には、国澤清典先生が助教授で赴任されており、その研究室には1年後輩の水野幸男氏(元OR学会会長)がおられた。卒業後、すぐに統計数理研究所に入られ、53年には東工大に助手として戻られた。当時は母集団分布の信頼区間についてなどの統計的な研究や再生過程について研究されていたが、その後、河田先生の示唆もあり、待ち行列理論の研究に進まれたようである。62年にはヒンチンの名著「待



合せ理論入門」を訳出されている。

1962年にはM/G/sに関して待ち人数分布と待ち時間分布との間に成り立つきれいな関係式を導いている。ちょうど同じころ、これらの平均値に関してはより一般的な条件下で、 $L=\lambda W$ というリトルの公式の論文が発表された。科学の世界では、機が熟して実が落ちるかのようになり、重要な事項の発見は得てして同時期に発生することがあり、その1つの例であろう。また、同年には電電公社におられた大前義次氏と共著で「待ち行列理論と実際」を刊行されている。これは75年に大幅に改訂され、「応用待ち行列理論」として多くの人に理論の応用・実務への展開の原典として読まれてきた。また、待ち行列関連の本としては、高橋君との共著「混雑と待ち」(2001)が、式を使わない待ち行列と唱って、寺田寅彦ばりの現象アプローチで誰もが楽しめる人気の書となっている。

1963年から65年にかけて真壁先生と一緒に信頼性システムにおける取り替え政策について研究された。また、これらの理論的な研究と並行して、国澤先生と一緒に、専売公社や国鉄、道路公団、電電公社などのプロジェクトや委託研究にも携わられ、OR・数理の実務への展開も数多く手がけられている。また、1966年から88年まで、日本科学技術連盟のOR教育コースの委員長兼講師として企業人へのORの普及に献身されている。その他、多くの企業等の研修コースでも講師を務められた。それらの経験を踏まえて書かれた「おはなしOR」(1983)は動物園の仕事を題材に身近なORを展開した楽しい入門書である。

1968年には応用物理学の教授となられたが、72年には情報科学科の新設に協力し席を移された。そのとき高橋君が博士課程を終え助手となっている。75年には高橋君が東北大に転出し、小島政和君が慶應から助手として採用された。小島君が助教授となった後は京都大学から木村俊一君が採用され、その後を木島正明君がロチェスターから戻って助手となり先生を支えた。89年に退官されるまで、情報科学科のORグループは自由な雰囲気のもとに、学内外はもとより諸外国からも多くの研究者・学生が出入りする教育研究の場となった。経営工学科にいた私の研究室の学生諸君もその恩恵を受けている。鳩山由紀夫氏が経営工学科にいて木島君が学生だったころ、2人とも野球好きで、ユニフォームまで作って対抗戦を楽しんでいた。森村先生も長身を生かしての鮮やかな1塁守備のうまさを買われて、毎回引っ張り出されていたと聞いてい

る。この間、宮沢政清、木島正明、牧本直樹など内外で活躍する多くの研究者が巣立っている。

東工大での後半期は、森村先生は評議員や理学部長など学内の要職を歴任され、それに加えてOR学会の会長(1988, 89)をされたので本当にお忙しく、夜でないとなかなかお会いできなかった。

そのお忙しい最中、筑波大学大学院経営・政策研究科の中に社会人教育のための経営システム科学専攻を大塚キャンパスに新設する準備をされていた。これには鈴木久敏君が文字通り手足となって協力した。1989年に東工大を定年退官され、筑波大学の上記専攻の専攻長となり、新しい専攻の運営に腐心された。この社会人教育コースの独自性は、各大学に大きな刺激を与え、その後の社会人教育の活性化を促した。92年に日本女子大に理学部が設置されたがそのお手伝いもし、93年には同学部数物科学科に教授として移り、96年には理学部長を務め、それを最後に97年に大学教育の場からは離れられた。筑波大や日本女子大では、学生諸君の興味に応じてであろう、ファイナンスやマーケティング関係の仕事も多く、木島君と共著の「ファイナンスのための確率過程」(1991)がある。永年のご功績に対して、昨秋に瑞宝章を受章されている。

OR学会では、会長としてのお仕事の前にもいろいろな役職に就かれ多大な貢献をされている。その1つに、1975年に編集理事を担当され、機関誌と論文誌を現在のスタイルにされた。我々若輩の意見や要望を聞き入れて、森口繁一会長の理解を得て、日科技連とも交渉した上でのスタートであった。

このように先生は学科新設や企画立案の要に当たられることが多かった。計画は周到に準備され、実行にあたっては公平無私、果敢である。何事もスムーズになされたのはバランス感覚のよさと、その柔らかいお人柄によるものと思われる。ここにも、OR実施のお手本を見る思いがする。

森村先生ご夫妻を中心として、時おり集まる我々の仲間の会に「さんし会」と名前をつけていただいた。人が三人集まれば、その中に師を見いだすことができるという故事によるものらしい。内に三思の心を秘めて、いつまでも学びあう気持ちでという意であろう。

参考文献

- [1] 真壁肇, 森村英典: ORとSQCの種を撒いた河田龍夫先生, オペレーションズ・リサーチ, 53巻5号(2008).
- [2] 待ち行列研究会のHP(そこに森村先生の書かれた「待ち行列事始め(1)~(3)」が掲載されている).